研究紀要

第31号

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

ISSN 0289－4130

研究紀要

第31号

埼玉県における後期旧石器時代前半期初頭の様相　西井　幸雄

縄文早期末葉の刻み隆帯文羽状縄文土器の成立について
－埼玉県日高市天神峯遺跡出土土器の分析から－　金子　直行

大宮台地における磨製石斧の集成と形態変遷について
－加曽利Ｅ式期を中心に－　小茂田　幹

「有段口縁」の粗製土器の検討
－諏訪木遺跡と古宮遺跡を中心として－　鈴木佑太郎

関東地方における周溝持建物の展開　福田　聖

東国の横穴式石室に関する近年の研究について
－研究史と三次元計測の利用動向－　青木　弘

桶川市樋詰６号墳出土の大刀について　瀧瀬　芳之

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察（２）　渡邊理伊知

2017

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

樋詰６号墳出土大刀（部分）

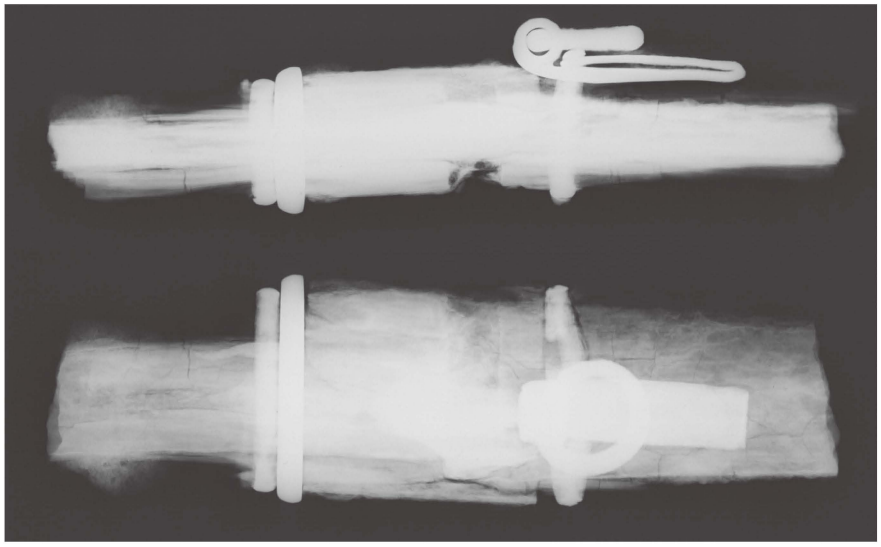
佩表

佩表（鞘口接合前）

背側

佩裏

Ｘ線透過画像



目　次

序

埼玉県における後期旧石器時代前半期初頭の様相…… 西井　幸雄　（1）

縄文早期末葉の刻み隆帯文羽状縄文土器の成立について…… 金子　直行　（21）
　－埼玉県日高市天神峯遺跡出土土器の分析から－

大宮台地における磨製石斧の集成と形態変遷について…… 小茂田　幹　（41）
　－加曽利Ｅ式期を中心に－

「有段口縁」の粗製土器の検討 …… 鈴木佑太郎　（63）
　－諏訪木遺跡と古宮遺跡を中心として－

関東地方における周溝持建物の展開…… 福田　　聖　（83）

東国の横穴式石室に関する近年の研究について…… 青木　　弘（105）
　－研究史と三次元計測の利用動向－

桶川市樋詰６号墳出土の大刀について…… 瀧瀬　芳之（125）

鉄鏃からみた「征矢」と「野矢」についての予察（２）…… 渡邊理伊知（133）

関東地方における周溝持建物の展開

福田　聖

要旨　関東地方の周溝持建物は、前稿で検討したように北陸、東海地方と密接な関係がある。

仔細に検討すると、北陸地方とは古墳時代前期を通して一貫した関係が認められた。特に前橋台地との関係は密接である。東海地方東部とは時期ごとに濃淡があり、古墳時代前期中葉段階には建物跡の例そのものが激減し、関東との関係は不明瞭となる。

関東地方の周溝持建物は、弥生時代後期前半に排水の実用として導入されたが、後期後半の間隙後、古墳時代初頭に外来系文物の一つとして再導入され、北陸、東海両地域と関係を保ちながら、在地化して独自の展開が続く。

特に古墳時代前期前葉には、「開口型４本主柱」の「広溝式平地建物」が、「北陸型」、「東海型」、「関東型」の地域型を持ちながら、広い範囲で展開する。関東地方はその一翼なのである。前期中葉以降は、中心となる分布域が利根川流域に変化し、盛行する前橋台地では「北関東型」が展開する。前期末をもって周溝持建物は主たる建物形式としては用いられなくなり、その後には専ら実用の建物形式として少数が存続していく。そこに、古墳時代前期における周溝持建物盛行の社会的意義が示されていると考えられる。

はじめに

筆者はこれまで、関東地方における周溝持建物について検討し、古墳時代前期にこの種の建物が造られる社会的意義について述べてきた (福田 2014 ほか)。

これまで網羅的に集成を進め、前稿ではその系譜について検討した (福田 2015)。本稿では、その検討を前提に、弥生時代後期から古墳時代前期の関東を中心に、東海、北陸、三地域の展開の様相を整理する。

１．周溝持建物の展開に関する論考

周溝持建物の研究史については、既に拙稿でまとめている（福田 2009)。本稿と関係する周溝持建物の展開に関する論考としては、岡本淳一郎 (岡本 2006 ほか)、石守晃 (石守 2003) らの一連の研究があるが、詳細はそちらを参照願いたい。本稿では、必要に応じて触れることにしたい。

また、松井一明は「周溝付建物」の静岡県の様相と西日本との対比、静岡から関東への伝播の様相の解明を企図して論考を発表している (松井 2016)。本稿と関係する部分も多いため、その内容について、ここで詳しく確認したい。

松井は、遠江、駿河・伊豆の両地域の周溝持建物を「当時の地表面下を掘削した竪穴住居を伴う」「Ａ類建物」、「地表面よりの掘削はなく、床面が当時の地表面とほぼ同じになり、周堤帯をもつことで結果的に竪穴住居となるＢ類建物」(P58ℓ 8 ～ 10) に分ける。加えて、これらの建物はいずれも４本柱であることを指摘している (同ℓ 11)。

松井は、この下位分類として、周溝の形態による分類を行い、広溝で周溝の１箇所が開口し、溝底が同一レベルの１類、複数の土坑が連なって幅広の周溝状になる２類、狭溝で周溝の１箇所が開口し、溝底が同一レベルの３類、竪穴住居の壁周溝と同様の幅のごく狭い周溝の４類に分けている

(P58ℓ 13～17)。

松井は、この分類をもとに、静岡県内の周溝持建物についてまとめ、低地集落はＢ１～３類建物が主体で、高地集落はＡ３・４類建物が主体となることを明らかにした。

次に各建物類型における周溝の機能について検討する。１・２類は排水用としては必要以上に幅広であるため、「周堤帯の土を確保する」(同ℓ30) 目的で掘削されたとしている。逆に、３類は１・２類に比して幅が狭いため専ら排水用とする。４類は埋め戻されて使用されているため、「壁溝と同じ周堤帯の外側の壁面保護のための杭や板を固定するための掘方の小溝」(同ℓ 36)、「暗渠排水」(P59ℓ 1) の機能を推定している。また、同じ集落内でも地表面の湿気の有無による、１・２類、３・４類の使い分けが想定されている (P59上段)。更にその上屋構造については、Ａ、Ｂ類とも周堤帯による土壁の竪穴状構造になるとしている。つまり、Ｂ類の建物は低地進出のための竪穴建物なのである。そして、こうした防湿構造を持つ建物の出現を、それを含む低地進出のための土木技術による開発を象徴する遺構として位置付けている (以上 P59 より抜粋)。

更に、竪穴建物、掘立柱建物の建物形式の組み合わせによって集落を類型化し、周溝持建物の有無によって細分を加え、静岡県におけるその変遷を整理する (同 P59～61)。

即ち、竪穴のみからなる１類、竪穴主体で１～２割の掘立柱建物を含む２類、２類の内周溝持建物を持たない集落を２ａ類、竪穴と周溝持建物の併存を２ｂ類、周溝持建物と掘立柱建物の併存を２ｃ類、竪穴主体で３～４割の高率で掘立柱建物を含む３類、掘立柱建物主体で１～２割の竪穴建物を含む４類、掘立柱建物のみからなる５類である。

この整理は、松井の検討の結果ともいえる部分であるため、ここでは長文になるが、まとめの部分を引用したい。

「中・東遠江～駿河地域の後期初頭の 1c・2c 類集落は、周溝付建物が導入され、排水機能と防湿対策がなされた低地集落であった。しかしながら、中・東遠江～西駿河地域では、後期中葉以降になると低湿地集落を維持することをあきらめ、台地や丘陵地に移住することで爆発的な高地集落の増加をもたらした。これら高地集落のうち 1b・2b・3b 類集落の愛野向山Ⅱ遺跡、春岡遺跡、上の平遺跡、駿河山遺跡で周溝付建物の導入が認められるため、低地集落よりの進出で成立した高地集落と理解できる。後期末から古墳初頭になると遠江では 3b 類の高地集落の大平遺跡、駿河でも 2c 類の低地集落の汐入遺跡や小黒遺跡のように、大型の周溝付建物と大型の独立棟持柱付掘立柱建物のセットとなる首長居館集落の出現も特筆され」るとしている (P61ℓ 6～13)。

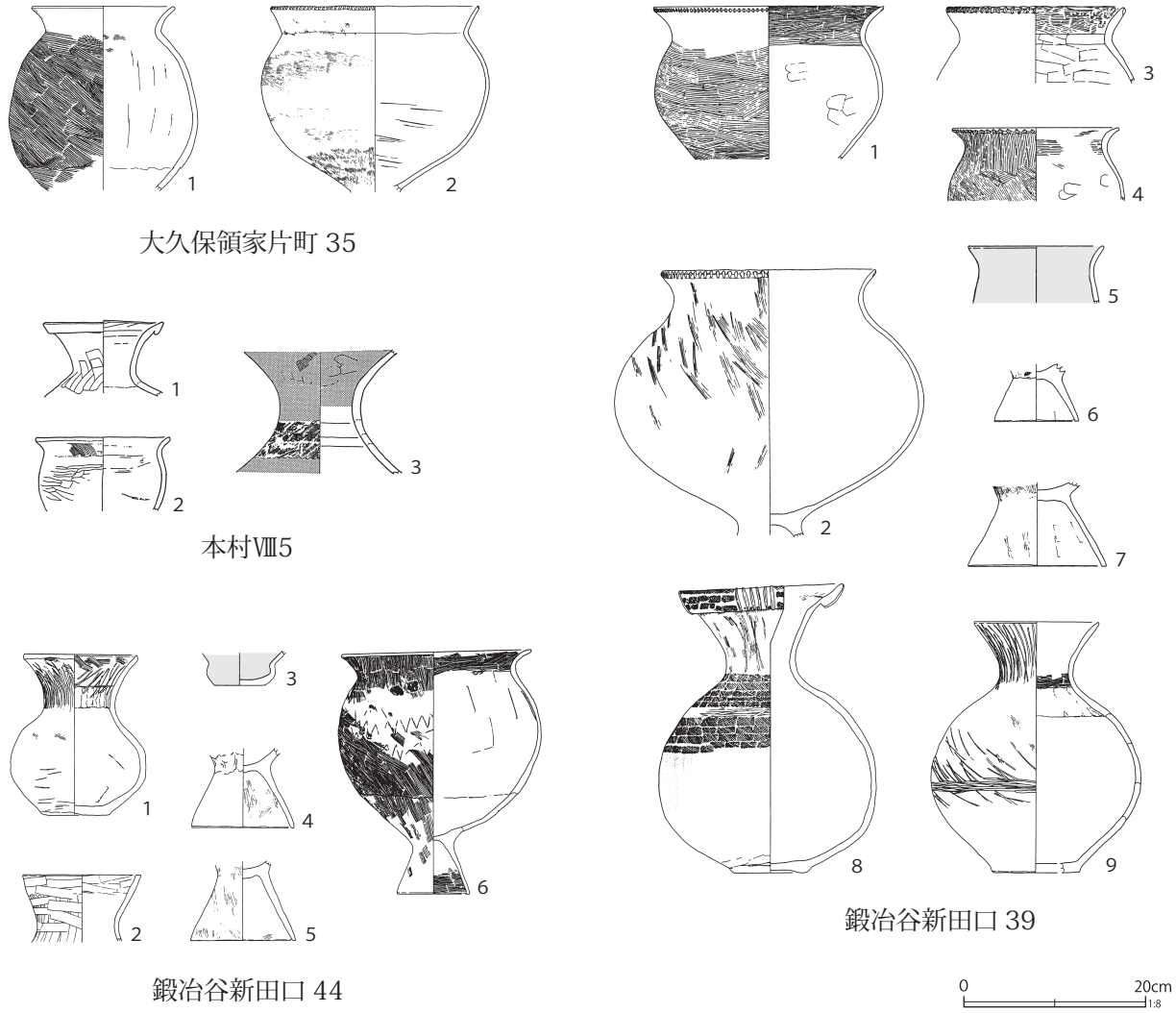
松井の検討について付言すれば、松井の分類は、岡本淳一郎の分類とともに、地域に根差した分類として尊重されるべきものと考える。

同一遺跡における周溝の有無については、もちろん地表面の乾燥度合いにもよるだろうが、関東地方ではそれのみに留まらない場合があることを、埼玉県川口市三ツ和遺跡を例に示し、更に複数の種類の建物が立ち並ぶ集落景観をこれまで推定してきた (福田 2014 など)。また、上屋構造については、岡村渉の登呂遺跡での調査所見をもとに、松井と同様の推定を行っており、両地方で同様の上屋構造を持つと考えられる。

建物分類における松井の記述は、低地開発と移住といった分類の解釈が一体となっており、また集落類型の変遷の記述は類型の階層的位置づけの解釈と一体となっており、分かり辛い側面がある。筆者がその意を汲み取れたかは心許ないと言わざるを得ない。

また、建物類型の推移については、本稿の検討後に述べることにしたい。

２以降では、岡本、石守、松井らの成果を参照



第１図　関東地方の周溝持建物出土土器（古墳時代初頭）（各報告書より転載）

しながら検討をすすめることにしたい。

２．周溝持建物出土土器の位置づけ

周溝持建物の検討に入る前に、まず時間軸となる各地の編年について整理しておこう。

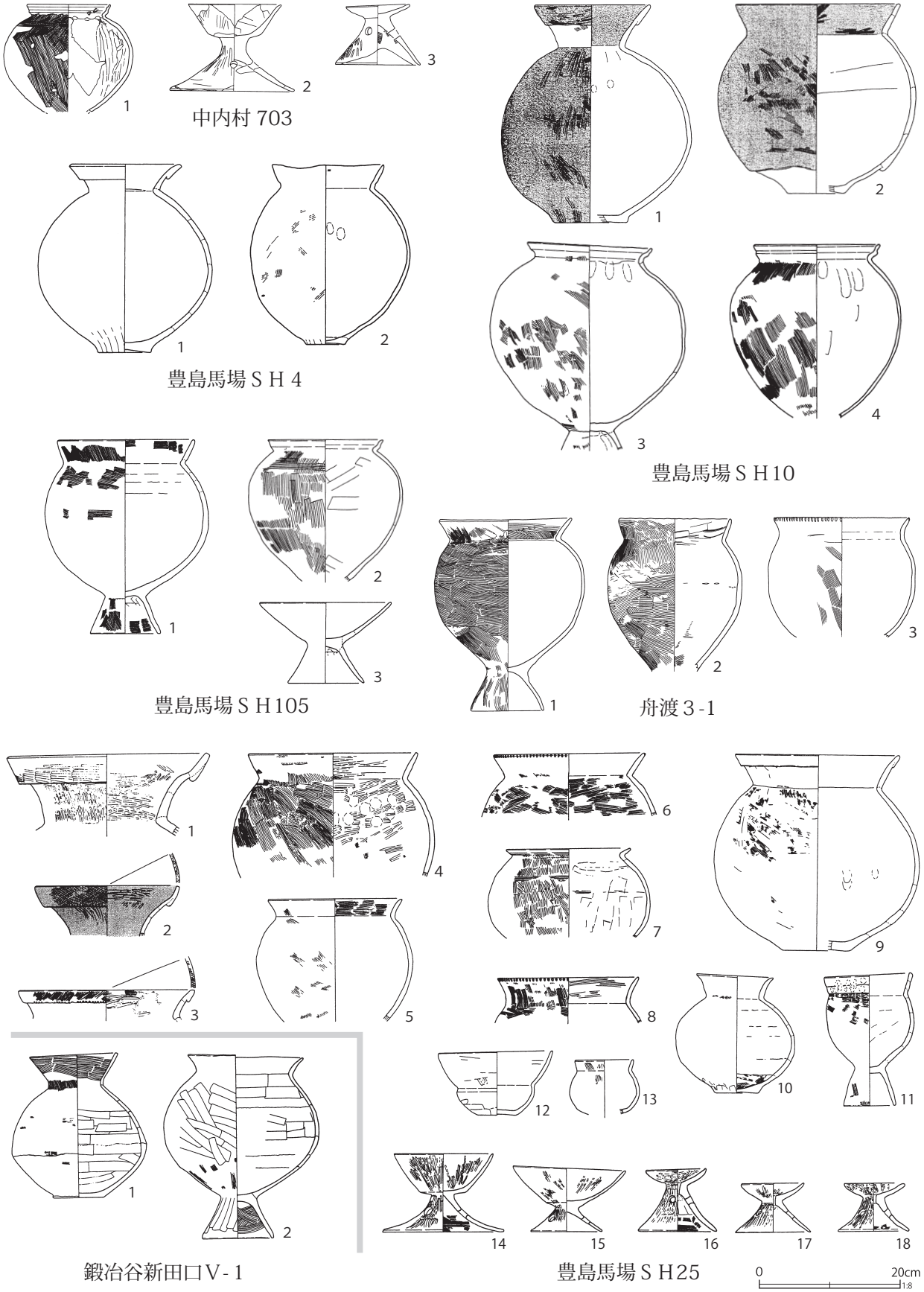
なお、ここではあくまで周溝持建物の検討のための時間軸の設定であり、かつ関東地方を中心に考えることから、各段階の詳細については別に譲ることをご寛恕頂きたい。また、本来なら遺跡名の後に「ー遺跡」と付すべきだが、煩雑となるため省略した。

（１）関東地方

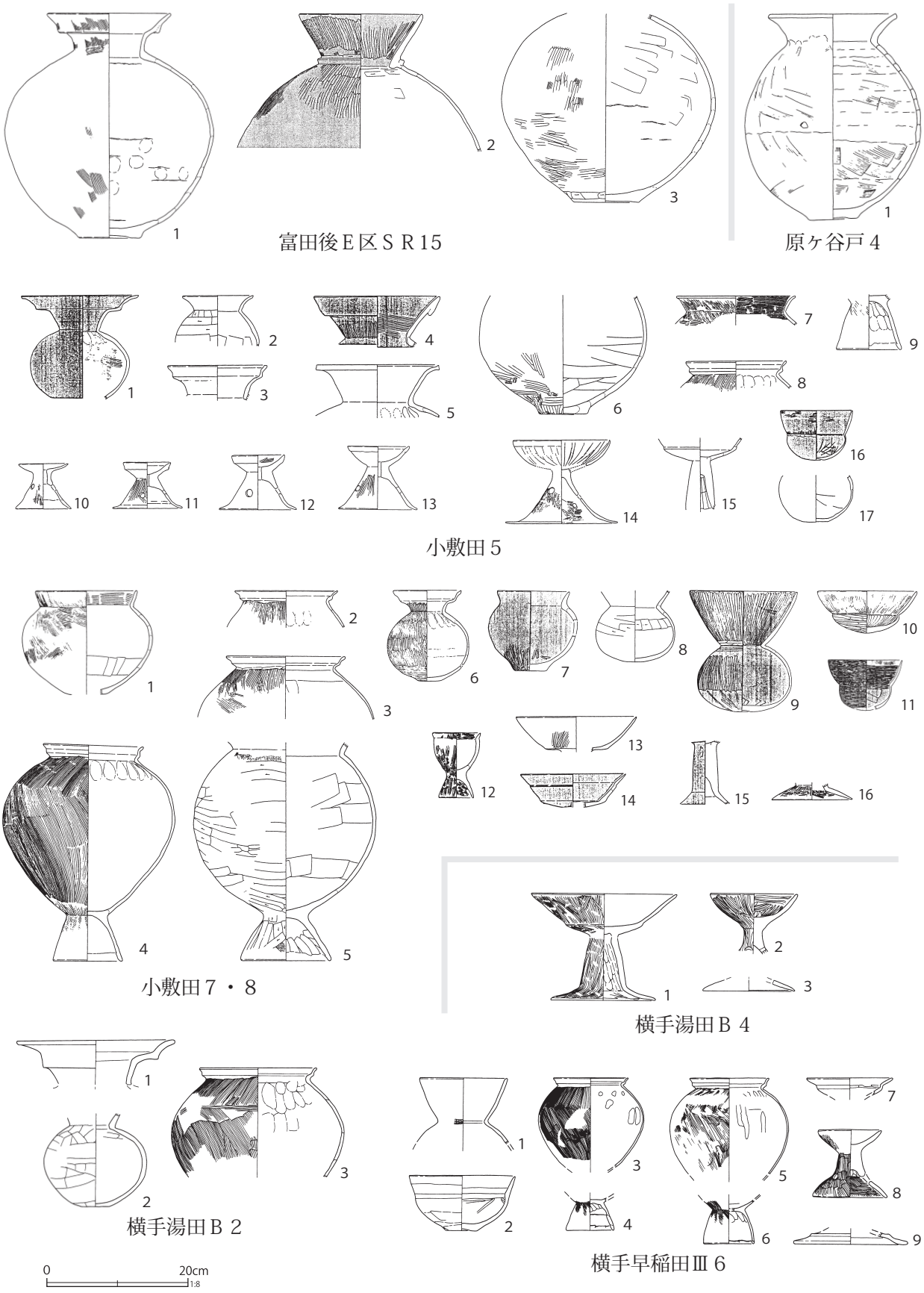
まず、関東地方については、先駆的な千葉県木更津市高砂は大村編年の久ケ原２式にほぼ該当する（大村 2004・2009）。後述する静岡県小笠町川田・東原田（新堀ほか 2001）がやや先行するが細分せず、ここでは一括して弥生時代後期前半段階として扱う。

関東地方のその他の資料は、ほとんどが弥生時代終末以降に位置づけられ、後期前半の高砂遺跡との間では間隙がある。

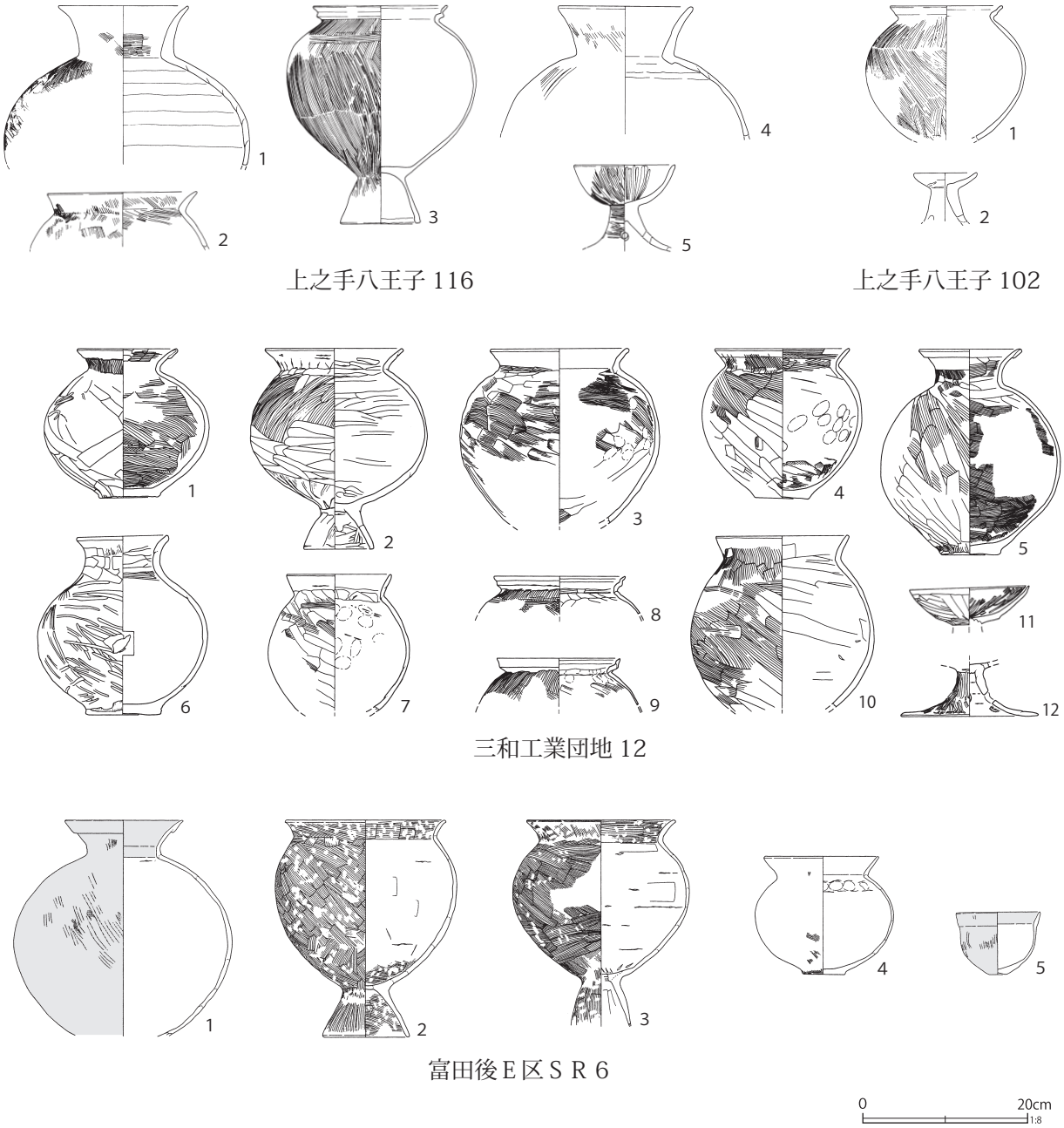
次の段階は、関東地方では所謂前野町式が該当する。別稿（福田 1999）で述べたように、筆者はこれらの土器群を古墳時代に入るとする立場を取るため、この段階を古墳時代初頭とする（第１図）。



第２図　関東地方の周溝持建物出土土器（古墳時代前期前葉）（各報告書より転載）



第３図　関東地方の周溝持建物出土土器（古墳時代前期中葉）（各報告書より転載）



第４図　関東地方の周溝持建物出土土器（古墳時代前期後葉）（各報告書より転載）

後掲する資料の内、埼玉県戸田市鍛冶谷・新田口 12（古段階）・39（西口 1986）、戸田市前谷１（塩野・伊藤 1978）、さいたま市外東３・４（君島 1999）、東京都北区豊島馬場ＳＨ 12(中島ほか 1995) 出土資料が該当する。周辺遺跡では、筆者が担当したさいたま市大木戸（新屋・大屋 2012）、蓮田市ささら古段階（新屋・福田 2007）、さいたま市上の宮遺跡（新屋・福田 1999）出土資料がほぼ同時期と考えられる。

３段階目以降は古墳時代前期である。以下では東松山市反町遺跡において行った時期区分に従って、古墳時代前期を３段階に区分する（赤熊・福田 2011）。

古墳時代前期前葉（第２図）は、くの字状口縁の壺・甕類、二重口縁壺の定着を指標とする反町Ⅱ－１期である。埼玉県内では鍛冶谷・新田口 13・21・34、外東９、川島町富田後Ｂ４・Ｄ 25・26・Ｅ 10（鈴木 2011）、小敷田 13（吉田

1991)、東京都内では豊島馬場 10・25・134、群馬県域では前橋市中内村前 703（石守 2003)、横手早稲田Ⅱ－１（斉藤 2001）出土資料が該当する。

古墳時代前期中葉（第３図）は、反町Ⅱ－２期に相当する。埼玉県内では富田後Ｂ３、Ｅ区ＳＲ６、小敷田 20～22 が該当する。群馬県域の例は、ほとんどがこの時期以降と考えられる。特に三和工業団地 14 号例 (坂口 1999) は良好な資料である。

古墳時代前期後葉は反町Ⅱ－３期である（第４図)。長胴化し頸部のしまりが弱い壺、甕類、下加南型高坏、エックス字状器台、裾部が外反する高坏を特徴とする。富田後Ｂ 19・28・Ｄ 29・42・48・50・Ｅ 15、小敷田４～10、加須市（旧騎西町）小沼耕地１（田中 1991）などが該当する。小沼耕地の例は中期に降る可能性があるが、接続する時期の例として、本時期に含めた。

続く古墳時代中期はほとんど例が知られておらず、行田市鴻池１（田部井・金子 1977)、小沼耕地２・３、川口市二軒在家（春日 2000）が該当する。

以上のように、弥生時代後期前葉の１段階、古墳時代初頭の１段階、古墳時代前期の３段階の５段階を、段階区分として設定する。

（２）東海地方

筆者は東海地方の土器編年の詳細について明るくないため、以下の出土資料の位置づけを、『弥生土器の様式と編年　東海編』（加納・石黒編 2002　以下では東海編編年と呼称）にもとづいて行った。

また未公開資料も多く、それらについては静岡県考古学会の『静岡県における弥生時代集落の変遷』（静岡県考古学会 2002)、『駿河における古墳時代前期集落の再検討』（静岡県考古学会 2015）によった。合わせて、静清平野の資料の位置づけについては、小泉裕紀の編年を参照した

第１表　時期区分の基準資料と編年の併行関係

	周溝持建物跡出土資料（関東）	関東	北陸	東海東部	静清平野
		（赤熊・福田）	（田嶋 1986）	東海編編年	小泉 (2015)
古墳初頭	鍛冶谷・新田口 12・39 大久保領家片町 35 外東３・４ 豊島馬場 SH12	反町Ⅰ-5 反町Ⅱ-0	4・5 群	Ⅵ	静清１・２
古墳前期前葉	鍛冶谷・新田口 13・21・34、Ⅴ-1 外東 9/ 小敷田 13 富田後 B4・D25・26・E10 舟渡 3-1 豊島馬場 4・10・25・34・105 中内村前 703 横手早稲田Ⅱ-1	反町Ⅱ-1	6・7 群	Ⅶ	静清３ 静清４
古墳前期中葉	富田後 B3・E6 小敷田 20～22 三和工業団地 14 上之手八王子 102・116	反町Ⅱ-2	8・9 群		
古墳前期後葉	富田後 B19・28、D29・42・48・50、E15 原ケ谷戸 4 小敷田 4～10 横手湯田 B2-1・B4 横手早稲田Ⅲ-6	反町Ⅱ-3	10 群		

(小泉 2015)。

東海地方で周溝持建物が検出されているのは、浜松市以東の東海地方東部である。最も古い例は、川田・東原田で、中期の白岩式から継続し、主体は後期前半に位置づけられる。東海編編年ではⅤ―１期に相当する段階である。掛川市上ノ平（田村ほか 2008）は、中葉段階に幅狭周溝持建物が造られるようになると推定されている。

静岡市登呂は、後期初頭段階から後期後半までの３段階に亘って集落が展開する（岡村 2005・2008)。

後期後半はⅤ－２期に当たる段階で、菊川式の後半に当たる。遠江では高地の袋井市愛野向山、

春岡、上ノ平の各遺跡、駿河でも高地の駿河山 (河合 2010) など高地の例が多くみられるのが特徴である。静清平野では、静岡市小黒、汐入がこの時期から始まる。小黒では区画 SD1001 が掘削されている (小泉 2015)。

古墳時代初頭は東海編編年Ⅵ期、小泉の静清１・２段階に当たり、遠江では高地の浜松市大平 (鈴木 1992)、袋井市若作 (吉岡・松井 1990) のみである。駿河では低地の例が急増し、静西平野に集中する。小黒では２段階目の区画溝 SD002 が掘削されている。汐入はＶ－２期からこの時期までの短い期間に３段階で展開したとされている（岡村・天石 2015）。飯田 (中西・杉山 1982・1983、大川 1987) や河合、豊田は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続する集落だが、この時期に周溝持建物が建てられている。河合はこの時期のみならず、弥生時代後期から古墳時代中期まで、長期間造営が継続している。

東海編編年Ⅶ期、小泉の静清３段階以降の古墳時代前期の周溝持建物はほとんど知られておらず、わずかに豊田・河合で継続するのみで、前葉まで留まるものである。

前期中葉、後葉は、現段階では、一旦空白の時期となる。古墳時代中期には河合の例が知られている。

（3）北陸地方

北陸地方の資料については、すでに岡本淳一郎によって時期変遷が整理されている（岡本 2006）。

その内訳は、弥生時代中期前半１軒、中期中葉２軒、中期後半９軒、中期のみの２軒、後期 27 軒、終末 11 軒、古墳時代前期 22 軒、中期１軒、後期１軒である。各遺跡の時期は表２に示した。

その際に、本稿では編年的な物差しとして、北陸の編年として共通の理解が得られている田嶋明人による漆町編年（田嶋 1986）を基準とし、堀大介による編年を参照した（堀 2006）。

具体的には漆町３群を弥生時代後期後半、同４・５群を終末期、６・７群を古墳時代前期前葉、８・９群を前期中葉、10 群を前期後葉とする。

特に関東地方との検討で細かな位置づけが必要な弥生時代終末、漆町４群以降の資料については原典に当たり、遺構の様相と出土遺物を確認し、遺跡名の後の（　）内に漆町編年の時期を表記した。また、下線の資料については原典に当たることができず、楠正勝の教示により位置づけた。

その作業の中で、岡本の位置づけとは異なると考えられる資料があり、それについては▽を付して示している。具体的には、終末期とされている小松市平面梯川 101(堀内・川畑ほか 2000) が堀内の法仏３式に当たり後期に、野々市町長池ニシタンボ (吉田 1998)、七尾市万行赤岩山 (土肥 1993) が漆町３群で後期後半に、同じく終末期とされている小松市八里向山 (下濱 2004) は漆町３・４群に当たり、大部分が後期後半になると考えられる。また梅田Ｂには漆町１・２群相当の４次 SH01(柿田 2006) と漆町 11 群のＳＸ 12(柿田ほか 2004) の両者がある。

また富山県呉東地方の氷見市中谷内例は後期になると考えられる。

（4）関東地方を中心とした編年の併行関係

関東地方　以上の関東、北陸、東海の三地域の編年の併行関係については、古墳時代初頭から前期を中心に折に触れて述べてきた（赤熊・福田 2011 ほか）。表４では、筆者が用いてきた反町遺跡の時期区分を軸に、その関係を再度表示した。

なお、本論は土器編年をその旨とするものではないため、詳細については別に述べたい。

３．周溝持建物の展開

２の時期区分に従って、関東地方を中心に周溝持建物の展開を整理する。

（1）弥生時代後期

関東で最も古い久ヶ原２式とされる上総の高砂

は、地下水位の高い冠水しやすい箇所に造られており、排水の用という本来的な用途を感じさせる。後述するように、登呂の２期段階の例、川田・東原田と平面形、規模とも同様である。

関東地方では、後期後半の例は知られておらず、間隙がある。

東海地方　東遠江の川田・東原田が伊場式古段階、あるいは菊川式古段階の後期前半とされ、それに次いで駿河の登呂等の例が知られている。

この両者は排水を志向した実利的な施設として掘削されており、本来的な周溝の掘削理由を示している。

いずれの時期の建物にも周溝が敷設されているが、特に注目されるのが建物の立面構造である。即ち地表面を掘り込まずに、周堤帯によって壁の高さを作出して竪穴状の空間を造り、伏屋をかけるという構造である。水が滲出する低地ならではの構造と言えるだろう。筆者も関東地方の掘り込みを持たない平地建物が、同様の構造である可能性を考えている（福田 2014）。

前述のように、登呂はその２期終末には用水路と一体化した構造に変容するが、前段階の２期の例と川田・東原田、高砂例は平面形、規模とも同様である。

弥生時代後期後半には、遠江の上ノ平、駿河の駿河山等の高地の例が知られている。

上ノ平では広溝、円形プランの周溝持竪穴建物群が造られる。同遺跡では古墳時代初頭まで、同様のタイプの建物が継続して造られている。その継続性故か、建て替えが多いのも特徴である。ほとんどが円形、一辺開口もしくは隅開口だが、ＳＢ 101 は方形、一辺中央開口で、同様のタイプの嚆矢的な例として注目される。

一方、駿河では汐入において定型的な広溝の集落が造られている。広溝式の平地建物で開口型というより一辺がない「一辺開口」と呼ぶのが相応しい平面形態である。４本主柱穴だが、登呂の例に見えるように、周堤による竪穴的構造を採る可能性も考えられる。最も多くの遺構が検出されている第１・２次調査の成果が未報告で詳細は不明だが、弥生時代後期後半から古墳時代初頭と位置づけられており（岡村・天石 2015）、古墳時代前期前半に大きく展開する「広溝式平地建物」「開口型４本主柱」の周溝持建物の先駆けとできるかが大きな問題である。

小黒も詳細は不明だが、岡村渉・天石夏実・小泉裕紀の三氏による最新のレポート（岡村・天石 2015、小泉 2015）では、３段階に区分され、小泉によれば氏の飯田式２段階から集落が始まるとされている。具体的な建物の展開は不明だが、周溝が複雑に重複するため、古墳時代初頭段階までの周溝持建物の継続が見込まれる。松井の整理した図面によれば、汐入同様の平地建物が造られていたと考えられる。平面形は隅丸方形に近く、広溝、一辺開口に近いほど開口部が広い。周溝の壁面は直線的である。

北陸地方　北陸地方では中期後半からの例が知られているが、ここでは本稿と関係する後期後半以降のみを対象とする。

弥生後期後半では、富山県呉東で高地の魚津市佐伯 (山本 1979)、低地の上市町江上Ａ・Ｂ (久々 1981) が知られている。石川県加賀では高地の八里向山、小松市八幡 (浜崎ほか 1988)、低地の白山市 (松任市) 宮永 (前田 1995)、小松市横江古屋敷 (高橋 1993)、長池ニシタンボ、白山市 (松任市) 八田小鮒 (木田ほか 1988)、中能登町 (鹿島町) 市藤井ザンジョンガリ (藤田 1994)、梅田Ｂ、平面梯川が挙げられる。能登では高地の七尾市奥原、宿東山 (北野 1987)、万行赤岩山、低地の七尾市 (田鶴浜町) 三引Ｅ (久田 2001)、七尾市市藤橋 (木立 1992) が知られている。

岡本は、「広溝式竪穴建物の増加、４本主柱の増加」（岡本 2006P257 ℓ５）を特徴として挙げている。

第２表　周溝持建物の基準資料

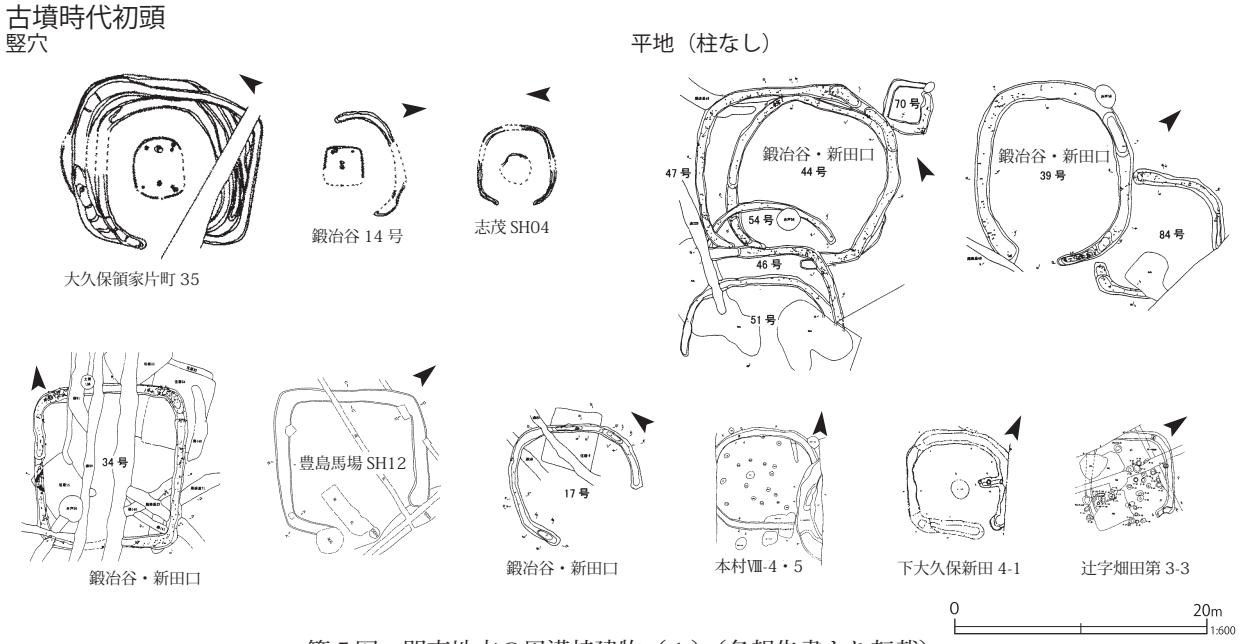
	関東	加賀	能登	富山	遠江（西）	遠江（東）	駿河
古墳初頭	鍛冶谷 14・17・34・39・44 大久保領家片町 35 本村Ⅷ-4・5 下大久保新田 4-1 辻字畑田 3-3 豊島馬場 SH12 志茂 SH04	漆町８・９（漆４） 漆町１号竪穴(漆４～６) ▽西念南新保Ｐ区 ▽横江古屋敷	二口かみあれた 1(漆 6) 二口かみあれた 2-3(漆 6)	下老子笹川	大平	若作 (高地)	汐入 小黒 豊田 飯田 河合
古墳前期前葉	中内村前 703・707 横手早稲田Ⅱ-1 鍛冶谷・新田口 5・16・Ⅴ-1 前谷 1/ 小敷田 15 富田後 BSR2・4・9、DSR26・27、ESR8・18 豊島馬場 SH04 ～ 06、10・11、25、34、102、105、109 舟渡３次 1/ 伊興 1	八幡 01(漆７・高地) 新保本町東 1(漆 6) 新保本町西 1(漆 6) 新保本町西 SB02(漆 6)	二口かみあれた 1(漆 6) 二口かみあれた 2-3(漆 6) 二口かみあれた 2-1(漆 7)	浦田 03・04(漆 6) HS-04(呉東)			豊田
古墳前期中葉	唐桶田２・4 上之手八王子 102・116 横手早稲田Ⅲ-1・3・4 横手湯田 A1 三和工業団地 12 富田後 BSR3・DSR22・ESR6 豊島馬場 SH129・135・王子地点 1	旭小学校 (漆８～９) 上荒屋 (漆 8)	二口かみあれた 9(漆８・9)				小黒
古墳時代前期後葉	上之手八王子 149・176 上之手石塚 59 横手早稲田Ⅲ-2・6 横手湯田 B1・2・4 小敷田 4・5・8・9/ 原ケ谷戸 4 富田後 BSR1・DSR6・ESR15 小沼耕地 1・3						
中期以降	鴻池 1(中期)	梅田Ｂ　SX12(漆 11)		中内谷 (後期)			河合 (中期)

これらの平面形は円形で、周溝は原則的に連続するが、下老子笹川 12（岡本ほか 2006）のように不連続で土坑状を呈する例もある。周溝壁は全体に凹凸が著しく、周溝幅は広狭がある。開口型の場合には開口部が狭く、下老子笹川 14 のように、コーナーに近い箇所に設けられている例も見られる。

広溝型４本主柱の竪穴建物は、関東地方には現状では認められないが、周溝は古墳時代初頭段階の関東地方の例と相似しており、今後関係が認められる可能性がある。一方、東海地方と北陸地方は、平地建物、竪穴建物の違いはあるが、ともに広溝式であり、相似点と相違点が認められる点には留意が必要である。

（2）古墳時代初頭

東海地方　遠江の大平、東遠江の若作、前段階から継続が見込まれる上の平（高地）、駿河の汐入、小黒、豊田、飯田、河合 (低地) の各遺跡が知ら



第５図　関東地方の周溝持建物（１）（各報告書より転載）

れている。

弥生時代後期に多く見られた高地の例は、大平、若作、継続する上の平を除いて見られなくなる。

高地の大平の周溝持建物は、方形区画建物群の一画、井口（井口 2015）によって「首長居住域」と推定される南西側に造られている。他遺跡の周溝持建物と異なり、竪穴の壁周溝と周溝が連結し、かつ建物の外側をかなり大きく囲み、谷へ流し込む特異な形態である。

竪穴以外にも、「政治・祭祀空間」の２号Ｂ方形区画は、柵列を伴い、通常の竪穴、平地建物とは異なり、独立棟持柱の桁行３間の大型掘立柱建物を囲繞している。

大平の例は、竪穴、掘立柱双方とも、実用を離れた建物の性格差、階層差を示すと考えられる。

また、後述する古墳時代前期中葉の群馬県高崎市三和工業団地例と、形態が酷似しており、時期が離れているが、一連の系譜関係が考えられ、注目される。

若作の例は、方形に近い隅丸方形で、標高の低い側に向かって開くため、平面形が３辺のみになっている。しかし、同時期の低地の汐入も同様の平面形であり、本来の平面形である可能性もある。

低地の汐入の例は、集落域の１・２次調査分が未報告であるため詳細は不明だが、東海編編年Ⅵ期までの継続が見込まれ、岡村・天石によれば、汐入の集落はこの段階で終息する。

また前段階の周溝持建物を継続する一般集落のみならず、その東側に独立棟持柱の建物群が立ち並ぶ松井の言う「祭祀空間」が成立している。松井はこの周溝持建物が限定的な大型建物であることから、大平と同じ居館的な性格を想定している（松井 2016p57ℓ 8）。

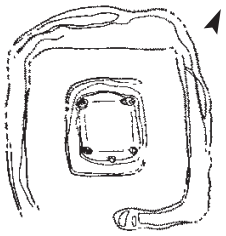
小黒も詳細は不明だが、前述の岡村・天石の中段階、小泉の小黒２期に当たり、後期末からの継続が見込まれる。

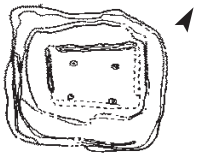
飯田は、全体が検出されたものがない。平面形は隅丸方形だがいずれも歪んでおり、一辺の中央、もしくは隅が開口する。開口の度合いは部分的で確実でないが、広狭が認められるようである。周溝の壁面は、汐入、小黒に比して凹凸が目立つ。

以上のように、東海地方では一般集落の建物形式から新たに階層的な優位性を示す遺構へという性格の付与、変更が認められ、この時期を最後に

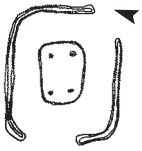
古墳時代前期前葉

竪穴


中内村前 703

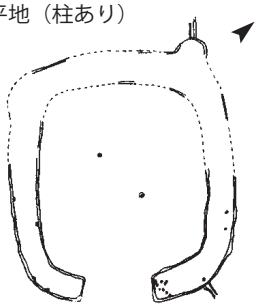

中内村前 707

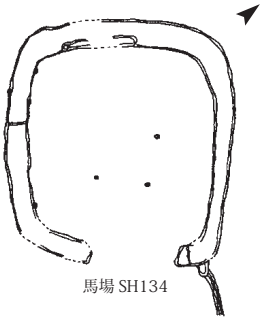
早稲田Ⅱ1

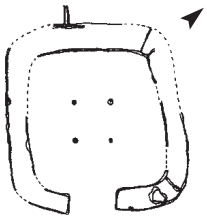

鍛冶谷 16 号

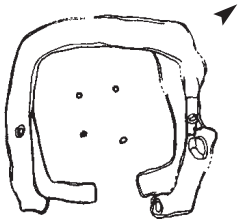
鍛冶谷５号

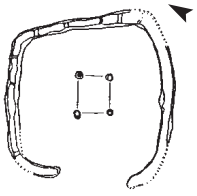
平地（柱あり）

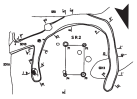

馬場 SH25

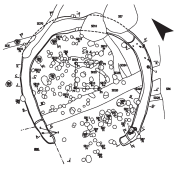

馬場 SH134

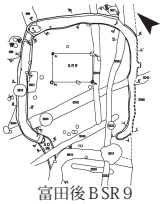

馬場 SH105


馬場 SH09・102

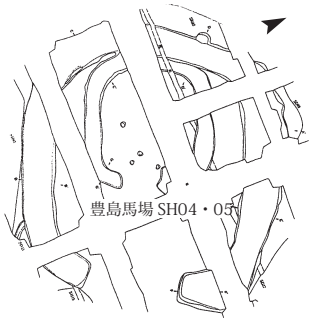

鍛冶谷Ｖ１号

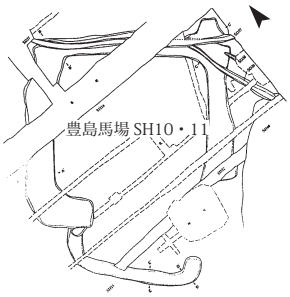

富田後ＢSR２

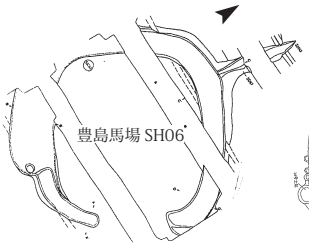

富田後ＢSR４

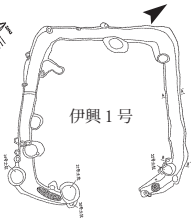

富田後ＢSR９

平地（柱なし）

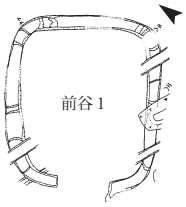

豊島馬場 SH04・05

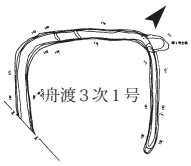

豊島馬場 SH10・11

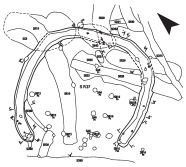

豊島馬場 SH06

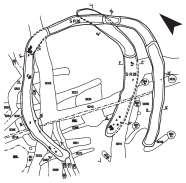

伊興１号

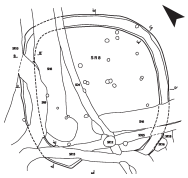
小敷田 15

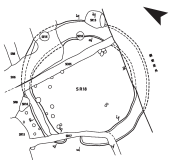

前谷１


舟渡３次１号


富田後ＢSR27


富田後ＤSR26


富田後ＥSR８


富田後ＥSR18

0　20m
1:600

第６図　関東地方の周溝持建物（２）（各報告書より転載）

造営が限定的となり、注目される。

北陸地方　呉東では、現状では下老子笹川のみで、分布は加賀に集中している。加賀では金沢市西念・南新保Ｐ区 01(楠 1996)、漆町 (田嶋 1986、樫田 1987)、横江古屋敷Ａ SI02 が低地の例として知られ、高地の例が現在のところ見られない。北陸地方ではこの時期に高地の例は極く少なくなり、低地の建物という印象が強くなる。この点は東海地方と共通した様相と言えよう。

建物の特徴としては、概ね円形、楕円形プランで、竪穴建物となる例が多い。柱穴は 4 本主柱となる。周溝は連続し、岡本が「囲繞型」とする開口部がない例が多い。

岡本が「開口型」とする例は少数で、小松市高堂 2-1(栃木ほか 1990) のような一辺中央開口のものは、開口部幅がごく狭い。

いずれも周溝の壁面には凹凸が目立つが、下老子笹川の各例は周溝が幅広で直線的である。

関東地方　荒川低地に例が集中し、東京低地では志茂 (中嶋・黒田 1995) の例が知られるのみである。大久保領家片町 (山田ほか 1996)、鍛冶谷・新田口をはじめとする諸例は竪穴建物の場合が多い。平面形は楕円形もしくは隅丸方形、各辺は次段階と比べるとほとんどが不整である。周溝は幅に広狭があり、開口部は狭く、一辺中央開口が大部分で、開口部がやや片側に寄っている場合が見られる。本村 (山田・久保 2000)、下大久保新田 (山田・駒見 1998) のような全周、隅開口の例は少数派である。全体に一辺中央開口への強い志向が感じられる。

以上の三地域の様相を相互に比較すると、関東地方の大久保領家片町、鍛冶谷・新田口などの竪穴建物の周溝持建物は、平面形、開口部が北陸（加賀）地方の例と相似している。また中央に建物が検出されず、平地建物が推定される例は、各辺の様相が東海（駿河）地方と共通するのが分かる。

前述のように、この時期の関東地方全体の周溝持建物については北陸系の色合いが濃く、その中で、後述する大平と三和工業団地の関係は、東海東部との継続的な関係を示す例として注目される。

このように、周溝持建物をめぐる東海、北陸との関係は、複雑で一筋縄では理解できないようである。それは、再三述べているように、開口部、平面形などが、全体に全く均一の様相を示していないからであろう。岡本がいうように加賀、駿河双方との恒常的な関係が維持されていた結果と考えられる。

（3）古墳時代前期前半

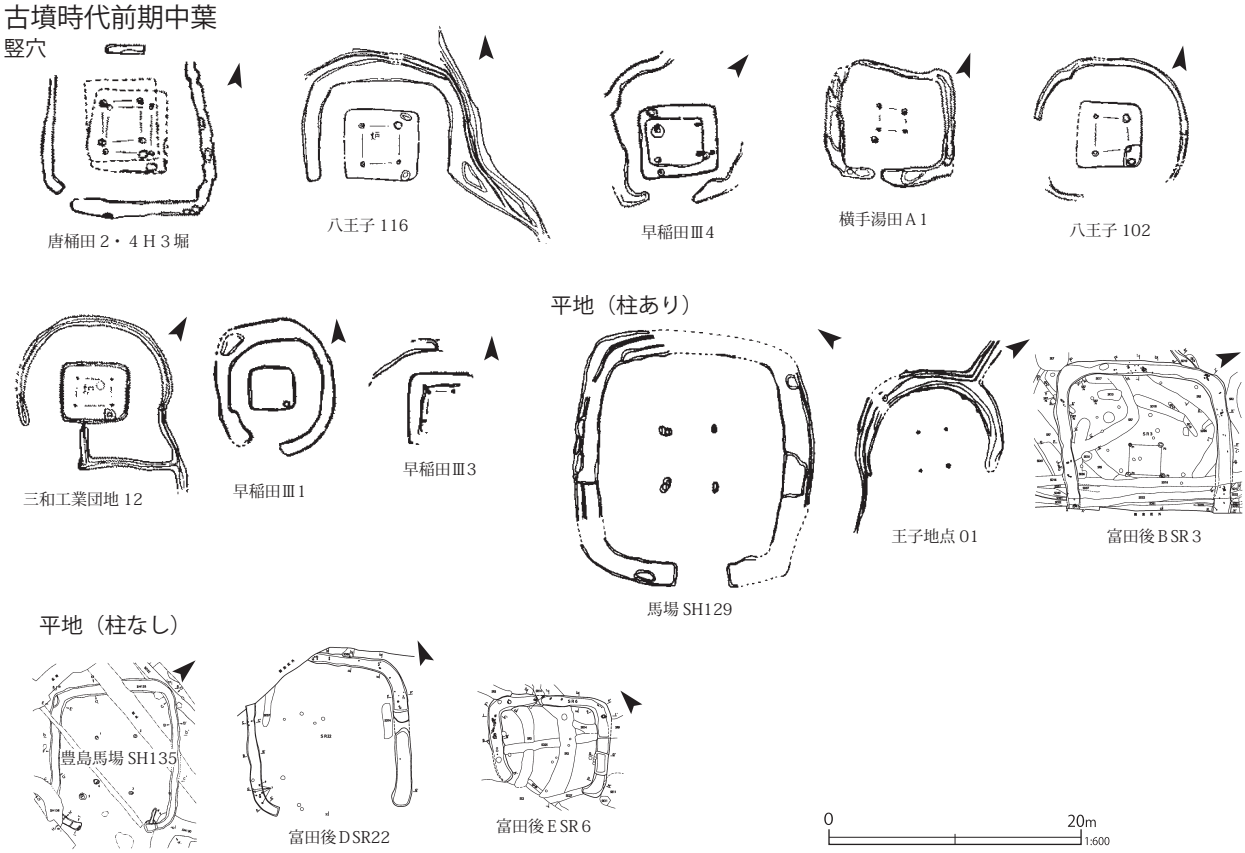
東海地方　東海地方では駿河の小黒などが知られるのみで、ほとんど周溝持建物が見られなくなる。高地の上ノ平は竪穴建物の集落に変容している。小黒は楕円もしくは丸みの強い一辺開口の例が多い。

北陸地方　全体の平面形が隅丸方形になる。周溝は、下老子笹川 12 のように不連続で土坑状を呈する例もあるが、基本的に連続するようになる。周溝の壁は全体に凹凸が著しく、幅は広狭がある。開口部は狭く、基本的に中央が開口するが、片側に寄る場合も見受けられる。

岡本は、古墳時代前期の特徴について、「古墳期の特徴は広溝式平地建物の増加、広溝式竪穴建物の激減である。また広溝式平地建物のほとんどが開口型 4 本主柱であることに注目しておきたい。」（P257 ℓ 39･P261 ℓ 1）とまとめているが、その様相はこの段階から当てはまる。

その一方で、狭溝式も少なくはなるものの一つの流れとして健在である。この場合は建物が竪穴となる場合が多い。

関東地方　関東地方ではこの時期以降例が急増する。特に注目されるのが、広溝、隅丸方形、一辺中央開口のタイプが、東京低地の豊島馬場、荒川低地の鍛冶谷・新田口、前谷のみならず、熊谷低地の小敷田、前橋台地の中内村前、横手早稲田



第７図　関東地方の周溝持建物（３）（各報告書より転載）

など非常に広い範囲で造られている点である。

定型化されたこのタイプは、前段階の駿河の汐入の例と非常によく似ており、また北陸地方の例とも相似している。汐入はこの段階まで継続せず、密接な関係が窺えるものの、直接の対比は困難である。

一方、やや形態は異なるが、「広溝式平地建物」「開口型４本主柱」を主体とする関東、北陸の共通性は、地域的に連接はしないものの一つの分布圏を形成していると評価できよう。

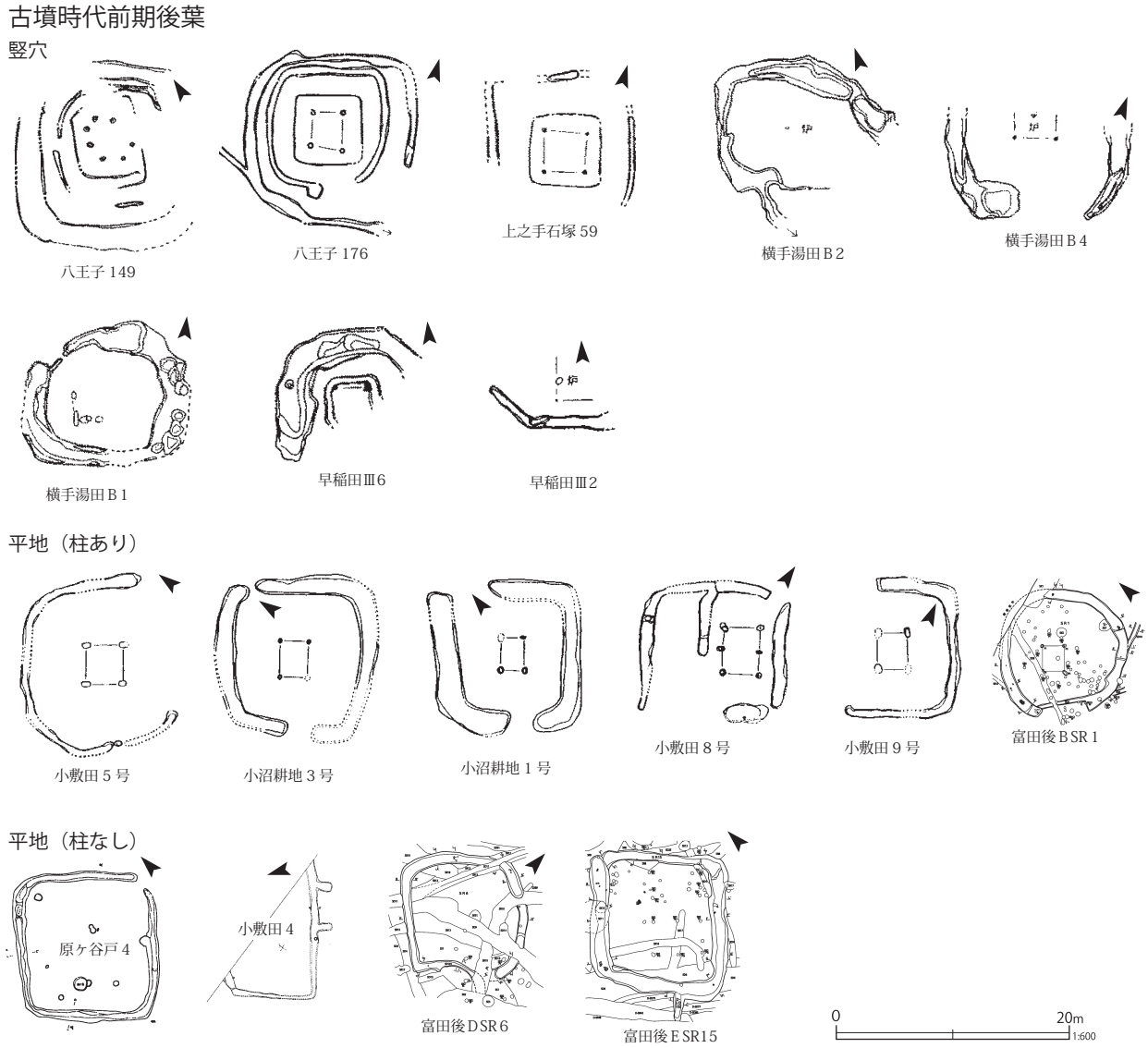
それは、古墳時代初頭段階に駿河で成立した「広溝式平地建物」「開口型４本主柱」が、この段階に周辺に広範に展開したとも言い換えられる。現段階では不明だが、駿河でも同タイプの建物が継続し、今後発見される可能性は十分に考えられる。

そうすると、「広溝式平地建物」「開口型４本主柱」の周溝持建物は、東海、北陸、関東の広い範囲で展開することになる。その中で地域型として、隅丸方形、やや不整な各辺、全周（囲繞）もしくは中央開口で、開口部の狭い「北陸型」、隅丸方形、整った各辺、一辺開口もしくは中央開口で開口部の広い「東海型」、隅丸方形、整った各辺、一辺中央開口で開口部の狭い「関東型」が、定型化した周溝持建物として造られていたのである。

一方、広溝タイプが大勢を占めるようになる中で、狭溝タイプの周溝持建物も継続している。特に鍛冶谷・新田口 16 号は、区画内の建物が竪穴で、中央＋隅に開口部が見られ、北陸（加賀）との関係が考えられる。前段階までの駿河地域の高地の例との関係も示す可能性もあり興味深い。

また、前橋台地の中内村前 707、早稲田Ⅱ－１などの諸例は、周溝の凹凸が多く、幅広、全周タイプで独自の様相を示しており、北陸との関係の深さを窺わせるものである。

ただし、前述の岡本の指摘にあるように、北陸では平地建物が主体となっており、竪穴建物が主



第８図　関東地方の周溝持建物（４）（各報告書より転載）

体となる前橋台地とは様相が異なるため、直接の関係性を求めることはできない。竪穴建物の展開は前橋台地独自の在り方であり、「北関東型」と呼称して差し支えないと考えられる。

（４）古墳時代前期中葉

東海地方　潜在的に継続していると思われるが、これまで継続的に見られた駿河の低地における周溝持建物は見られなくなる。

北陸地方　志雄市二口かみあれた９号 (上野ほか 1995) は、隅丸方形、狭溝式竪穴建物、開口型４本主柱で、開口部が狭く、各辺は不整である。松任市旭小学校 39 号 (木田 1990) は、隅丸方形、広溝式平地建物、開口型４本主柱で、開口部が狭く、各辺は不整である。竪穴式、平地式ともに平面形は隅丸方形、中央から若干外れた狭い開口部で、周溝壁は不整である。やはり、前橋台地の例と酷似しており、両者の継続的な関係が考えられる。

関東地方　基本的に前段階の様相が継続されている。引き続き豊島馬場、鍛冶谷・新田口、富田後などで、広溝平地建物、隅丸方形、一辺中央開口の周溝の「関東型」の周溝持建物を中心とした集落が展開するものの、富田後を除いて周溝持建物の造営は、ほぼこの段階で終焉を迎える。

富田後は前段階の様相を継続し、開口部が概して広めで、東海地方との関係を窺わせる。

群馬県域では、前橋台地の玉村町上之手八王子(三浦 1991)、横手湯田などの遺跡で本格的に周溝持建物の集落が展開する。形態は前段階を引き継いでいる。これらは、北陸の前述の例と酷似しており、北陸地方との継続的な関係が考えられる。

中でも前橋台地の上之手八王子 176 と加賀の金沢市上荒屋 05・06(出越 1995) は、平地、竪穴の違いはあるが、非常に形態が近似しており、注目される。

また、三和工業団地Ⅰで、前述の古墳時代初頭の浜松市大平と同様の構造を持つ竪穴の周溝持建物が検出されている。

大平例と三和工業団地Ⅰ例については飯島義雄による詳細な比較検討がある。飯島は、他の前橋台地の例とは異なり、両例の特徴である竪穴本体と周溝の広い間隔に、建物と周溝の間の通行可能な空間が存在したと推定している。このような構造の周溝持建物は、関東地方には他に例がなく、報告者の坂口一は「三和工業団地Ⅰ遺跡型」の呼称を提案している（坂口 1999)。

古墳時代初頭後半段階の大平と、古墳時代前期中葉の三和工業団地Ⅰの酷似する両者は、どのような系譜関係、時間的な関係を持つのであろうか。現段階では、両地域の間で持続的で活発な往来を推定するのに留めたい。それは東海系土器の動きとも合致しており、違和感がない。

このように、荒川低地では東海、前橋台地では北陸との関係性が継続すると考えられる。しかも、両者が排他的でないことを大平の例はよく示していると言えよう。

（5）古墳時代前期後葉

関東地方　数は少なくなるが引き続き継続する。これまで隆盛していた東京低地、荒川低地では、富田後を除いてほぼ分布が見られなくなる。これまで周溝持建物の中核的な集落の一つであった鍛冶谷・新田口は、竪穴建物の集落へ移行している。

一方前橋台地は例が多く、利根川流域で妻沼低地の深谷市原ケ谷戸 (村田 1993)、後続する小沼耕地など、前段階までの中心であった東京、荒川低地の周縁の遺跡の例が多くなる。分布域が移動したともいえるであろう。

その中で、荒川低地で唯一ともいえる富田後には、この時期 29 軒が造られており、関東でも周溝持建物の集落としては最大規模になる。

周溝の形態では、富田後のように広溝平地建物、隅丸方形、中央開口の「関東型」、前橋台地や埼玉県の県北部を中心とする広溝竪穴、方形、隅丸方形、多重、中央開口もしくは全周の「北関東型」の二通りが見られる。両者とも前段階と継続する様相である。

東海・北陸地方　明瞭な周溝持建物は見られなくなり、北陸も漆町 10 段階の資料は見られない。

以上のように、古墳時代前期の三地域の周溝持建物は、荒川低地の富田後、埼玉県北部の妻沼低地、前橋台地を除いて、ほとんど造られなくなり、主要な建物形式ではなくなったと考えられる。

しかし、全く途絶してしまうわけではない。古墳時代中期には、中川低地の小沼耕地、東京低地の川口市二軒在家などで例が見られ、更に会津坂下町の樋渡台畑 (古川・吉田 1990) が、古墳時代後期にも円形の細溝囲繞タイプの熊谷市下田町 (赤熊・岡本 2004)、深谷市沖田Ⅰ (木戸 1998) や富山県の中内谷などの例が知られている。これらは、低地の実用の施設としての周溝の存続を示す例であり、逆にここに古墳時代前期の周溝持建物の爆発的な隆盛の理由が隠れていると考えられる。

（6）関東地方の周溝持建物の展開

以上の関東地方における周溝持建物の展開をまとめたい。

関東地方の周溝持建物は、後期中葉の高砂に始まり、後期後葉に一旦途絶えた後、古墳時代前期を通して盛行する。

弥生時代後期中葉の上総の高砂遺跡例は関東地方で最も早い例だが、現在のところ単発である。低地に立地し、平面形は円形、竪穴、全周型、岡本のいう囲繞型で、広溝である。

古墳時代前期初頭は東京低地、荒川低地に例が集中する。建物は竪穴、周溝の平面形は楕円形もしくは隅丸方形で、周溝壁面は不整である。幅は広狭があり、開口部は狭く、一辺中央開口が大部分である。

古墳時代前期前葉には例が急増する。特に注目されるのが、平地建物、広溝、隅丸方形、一辺中央開口の「関東型」が、東京低地、荒川低地、熊谷低地、前橋台地の非常に広い範囲で造られている点である。

狭溝タイプの周溝持建物も継続し、北陸（加賀）の例と形態が相似する。また、前橋台地の諸例は、周溝の凹凸が多く、幅広、全周のタイプで、北陸地方との関係の深さが窺える。一方、前橋台地では竪穴建物が主体であり、平地建物が主体となる北陸とは様相が異なる。竪穴建物の展開は前橋台地独自の「北関東型」である。

前期中葉は基本的に前段階の様相が継続されている。引き続き「関東型」の周溝持建物を中心とした集落が展開するが、富田後を除いて、これまで周溝持建物が造られていた集落における造営は、ほぼこの段階で終焉を迎える。

群馬県域では、前橋台地の上之手八王子などで、本格的に「北関東型」の周溝持建物の集落が展開する。形態は前段階の形態を引き継ぎ、北陸の前述の例と相似し、継続的な関係が考えられる。

また、前橋台地では、三和工業団地Ｉで、浜松市の大平と同様の構造を持つ竪穴の周溝持建物が造られており、両地方の継続的、持続的な関係が窺える。

前期後葉はこの時期に最も軒数が多くなる富田後を除いて、これまで隆盛していた東京低地、荒川低地での例がほぼ見られなくなる

その一方で、前橋台地の例は多く、妻沼低地、中川低地など、東京、荒川低地の周辺の例が多くなり、分布域が移動したと考えられる。

二通りの建物が展開しており、富田後の広溝平地建物、隅丸方形、中央開口の「関東型」と、前橋台地や埼玉県の県北部を中心とする広溝竪穴、方形、隅丸方形、多重、中央開口・全周の「北関東型」が見られる。

以上のように、古墳時代前期の関東、東海、北陸では、周溝持建物が、荒川低地の富田後、前橋台地を除いて、ほとんど造られなくなる。

しかし途絶するわけではなく、古墳時代中期、後期にも少数ながら継続していく。

（7）関東と他地域の関係

以上の関東地方における周溝持建物の展開は、（5）までで述べたように、常に東海、北陸との密接な関係のもとに行われている。ここでは、両地域との関係を整理したい。

まず、弥生時代後期中葉の高砂例は、川田・東原田等との相似から、東遠江との関係で造られたと考えられる。

後期後半は、関東地方では現在のところ例が知られていないが、駿河では後に関東地方の広溝式平地建物との密接な関係が推定される汐入、小黒の集落が始まる。

古墳時代初頭では、加賀、駿河双方との関係が認められ、周溝持竪穴建物は、その形態から北陸（加賀）との関係が色濃いと考えられる。建物が検出されない例は、駿河の例と相似する。

古墳時代前期前葉は他地域との関係の上でも画期となる時期である。東海の様相が不明瞭ではあるが、関東、北陸、東海で、「広溝式平地建物」「開口型４本主柱」の建物が分布し、地域型として「関東型」、「北陸型」「東海型」が造られる。周溝持建物の集落としてよく知られる鍛冶谷・新田口、豊島馬場もこの形態のもので占められるようになる。また、狭溝タイプも継続し、北陸との関係が

考えられる。

この時期の前橋台地の様相は、南関東とは一線を画す「北関東型」と言えるもので、周溝の特徴からは北陸との密接な関係が推定される。しかし、平地建物が増加した北陸と異なり、竪穴を主体とするなど相違点も多く、独自の様相である

前期中葉では基本的に前葉の様相が継続され、他地域との関係も継続される。

富田後は前段階の様相を継続し、開口部が概して広めで、東海地方との関係を窺わせる。

前橋台地では、前段階の形態を引き継ぐ本格的な周溝持建物の集落が展開し、中でも上之手八王子 176 は加賀の例と酷似している。北陸との継続的な関係を示す好例と言えるだろう。

その中で、前橋台地の三和工業団地例と遠江の大平例は酷似し、直接的な系譜関係が考えられる。

前期後葉では、東海地方では明瞭な周溝持建物は見られなくなり、北陸でも漆町 10 段階の資料は認められず、地域間の関係は不明瞭である。

以上のように、関東地方の周溝持建物は、東海、北陸と常に関係性を保ちながら展開しており、既に岡本や石守によって以前から指摘されている関係性が追認された。

前稿でも述べたように、全体的な系譜関係としては、竪穴建物は北陸系、平地建物は東海系との関係が考えられる。しかし、細分された時期ごとに仔細に見ていくと、少し様相は異なる。

加賀を中心とする北陸地方とは、古墳時代前期を通して一貫した関係が考えられる。特に前橋台地とは密接な関係が窺えるが、前橋台地では竪穴を中心とする独自の「北関東型」が展開する。

東海地方では、特に駿河、静西平野との関係が考えられるが、その関係は濃淡が目立つ。濃密な関係が考えられる例としては、単発的な導入に終わった弥生時代後期中葉の高砂と川田・東原田、時期にややずれが見られるが古墳時代初頭の汐入と鍛冶谷・新田口、豊島馬場、大平と三和工業団地の三つの場合の相互の関係が挙げられる。この三者における両地域の例は酷似しており、極めて密接な関係を示すものである。しかし、古墳時代前期中葉段階になると東海の例そのものが激減し、両者の関係は不明瞭となる。

このように、加賀を中心とする北陸との一貫した関係性、弥生時代後期中葉、古墳時代前期初頭段階の濃密な駿河を中心とする東海地方東部との関係が明らかになった。こうした様相が、岡本が早くから指摘した両地域との関係の実態である。関東地方は周溝持建物分布圏の一翼として、常に他地域との関係性を保ちながら独自の展開を続けていたのである。

おそらく、周溝持建物のような遺構の形に痕跡を残さず往来した両地域の人々は数知れないのではないだろうか。その多様な往来のあり方が、周溝持建物の多様な展開にも現れていると考えられる。

4．まとめにかえて

以上、関東地方を中心に周溝持建物の展開について検討してきた。

前節で内容についてはまとめたが、ここでは最後に再度２点確認し、課題について述べたい。

第１は古墳時代前期前葉段階に「広溝式平地建物」「開口型４本主柱」という共通した構造の建物が広範に分布し、「関東型」、「北陸型」、「東海型」という地域ごとの「型式」として各々展開するという点である。これは、岡本の関東は東海、北陸の双方からの影響のもとで周溝持建物が造られるようになり、関東独自の型を生み出して盛行するろの早くからの指摘が正鵠を得ていたことを証するものである。と同時に関東側に視点を移せば「周溝持建物」という建物形式が、土器や石器などとともに、北陸－東海－関東という広い範囲に広がる文化要素の一つであったと言い換えることができる。

第２は、それと関連する北陸、東海との関係性

である。周溝持建物から見た場合、北陸との相互関係が常に一貫して認められ、安定した関係性が推定される。逆に東海系とは、前期初頭、前期前葉段階に密接な関係が窺えるが、それ以外の時期は希薄で、関係性に濃淡がある。これは、漠然と筆者が抱いていた東海系との一貫した密接な関係が認められるのだろうという予測とは異なる新たな知見である。

さて、1998 年以来、実に 18 年に亘って続けてきた周溝持建物の検討は、本稿をもってひとまず閉じることにする。長く続けて、どれ程の内容が明らかにできたかと言えば甚だ心もとない。満足すべき結果が得られたというわけでもない。逆にこの検討を通して、実に多くの知見を得、課題が生まれてしまった。これは感謝すべきことなのかもしれない。

いくつか今後の課題を挙げたい。まず、松井は台地、低地の集落を、開発という視点から整理したが、筆者はそれとは異なり、低地と台地の相互補完的な関係を予想した (福田 2009)。そして、それを前提に、両者に首長居宅を加えた三角形によって、関東地方の古墳時代の地域社会は形成されているという仮説を立て、モデルを示した (福田 2014)。だが、未だその仮説、モデルは実証されたとは言い難い。そのための取り組みが第一である。

次に、それを踏まえた上での墳墓との関係が問題となる。特に古墳という新たな墳墓が、どのような背景によって造営可能となったのかを究明しなければならない。

そもそも古墳自体が外来的な文化要素だが、その背景には、様々な地域の人々の往来が多大な影響を与えているのは今更言うまでもない。

第３点として、その外来系文化要素の再整理を挙げたい。古墳時代初頭から、Ｓ字状口縁台付甕に代表される東海系の波が、関東の古墳時代の開始に果たした役割は大きい。

しかし、確認点の２でも挙げたように、こと周溝持建物に関しては、その波には強弱があり、むしろ持続的な関係は北陸との間に求められる。この北陸との関係は、実は目新しいものではなく、関東の土器型式は常に中部高地と密接な関係があり、弥生時代の鉄の流通は日本海側の動向を抜きにしては語れない。古墳時代前期の北陸との関係性は、それまでの流れを継続するものなのである。

利根川流域における周溝持建物の継続性、前期中葉以降の玉作り、五領遺跡や屋敷裏遺跡における北陸系、山陰系土器の分布は、北陸との深い関係を感じさせる一連の文化事象である。東海系と合わせて、北陸などの日本海側の地域との関係性の究明、そしてそれが文化要素にいかに摂取、習合され一般化していくのかを知る必要がある。

合わせて、外来系文物の在来社会に対するあり方、古くに石野博信 (石野 1995) が指摘したように、外来系建物があるからといって、外来系土器やその他の文物が直接そこに見られるというわけではない。それは、かつて述べたように在来社会の人々と外来系文物をもたらす人々の関係性によるものと考えられる (福田 2014)。今後、在来、外来の文化要素の在り方の検討を通してそうした関係性に迫れればと考えている。

最後に、筆者自身の課題を挙げたい。この検討を始める端緒となった「方形周溝墓とは何かを探るための試み」を果たさねばならない。これまでの検討は、結果として周溝持建物の検討に収斂したため、恥ずかしながら当初の問いは全く頓挫した形になってしまった。この問いに対する答えを探す試みが、これからの筆者の最大の課題である。

周溝持建物については、いつの日か再考する日が来るだろう。それまでひとまず筆を置きたい。

謝辞

本稿を草するにあたり、楠正勝、滝沢規朗、岡村渉、西川修一、松井一明の各氏に御教示頂いた。

特に、楠氏からは手に入らなかった加賀の資料を提供いただき、資料について丁寧に説明頂いた。深く感謝申し上げたい。

拙著 (2014) でお名前を挙げさせていただいたが、周溝持建物の検討に際しては、長きにわたって、実に多くの方々にお世話をかけた。

ここで、お名前を挙げた方々と合わせて厚く感謝申し上げたい。

引用・参考文献

赤熊浩一・岡本健一　2004 『下田町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 245 集

赤熊浩一・福田　聖　2011 「Ⅶ. 調査のまとめ　3. 古墳時代の土器変遷」『反町遺跡Ⅱ』pp.652-673 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 380 集

新屋雅明・大屋道則　2012 『大木戸遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 405 集

新屋雅明・福田　聖　1999 『上の宮遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 252 集

新屋雅明・福田　聖　2007 『久台遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 339 集

飯島義雄　2004 「所謂「三和工団地Ⅰ遺跡型」の「周溝をもつ建物」の構造」『研究紀要』22 pp.251-268　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

井口智博　2015 「浜松市大平遺跡と遠江の古墳時代集落」『駿河における古墳時代前期集落の再検討』pp.49-58 静岡県考古学会

石野博信　1995 『古代住居のはなし』吉川弘文館

石守　晃　2003 『中内村前遺跡（２）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第 322 集

上野　敬・北野博司他　1995 『二口かみあれた遺跡』 志雄町教育委員会

上野　敬・土上ひろみ・前多美雪　1999 『二口かみあれた遺跡第２次』 志雄町教育委員会

大川敬夫　1987 『飯田遺跡Ⅴ』清水市教育委員会

大村　直　2004 「久ケ原式と山田橋式」『南関東の弥生土器２』pp.40-58　六一書房

2009「南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年」『市原市南中台遺跡・荒久遺跡Ａ地点』pp.299-335　市原市埋蔵文化財調査センター報告書第 10 集

岡本淳一郎　1997 「“周溝をもつ建物”について」『埋蔵文化財調査概要―平成８年度―』pp.133-139

1998 「弥生時代周溝遺構に関する一考察」『富山考古学研究創刊号』pp.45-52

2003 「「周溝をもつ建物」の基礎的研究」『富山大学考古学研究室論集　蜃気楼－秋山進午先生古希記念－蜃気楼』pp.123-152　六一書房

2005 「周溝をもつ建物の分類と系譜」『弥生時代の地域性と系譜』 中部弥生時代研究会

2006 『下老子笹川遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 31 集

岡村　渉　2004 『汐入遺跡　第６次発掘調査報告書』静岡市教育委員会

2005 『特別史跡　登呂遺跡　再発掘調査報告書（考古学調査編）』静岡市教育委員会

2008 「２弥生集落の諸相　③静清平野　登呂遺跡」『弥生時代の考古学８　集落からよむ弥生社会』pp.163-175　同成社

岡村　渉・天石夏美　2015 「静岡平野の古墳時代前期集落の様相」『駿河における古墳時代前期集落の再検討』pp.14-18 静岡県考古学会

小高幸男　1999 『高砂遺跡Ⅱ』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 154 集

及川良彦　1998 「関東地方の低地遺跡の再検討－弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に－」『青山考古』第 15 号 pp.1-34　青山考古学会

1999 「関東地方の低地遺跡の再検討（２）－「周溝を有する建物跡」と方形周溝墓および今後の集落研究への展望―」『青山考古』第 16 号 pp.35-66　青山考古学会

2001 「関東地方の低地遺跡の再検討（３）－「周溝を有する建物跡」の再検討－」『青山考古』第 18

号 pp.85-114 青山考古学会
柿田裕司　2004 『梅田Ｂ遺跡Ⅱ』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター
2006 『梅田Ｂ遺跡Ⅲ』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター
樫田　誠　1987 『第一小学校々地内漆町遺跡発掘調査報告書』小松市教育委員会
春日　肇　2000 『二軒在家遺跡』川口市遺跡調査会報告第 18 集
加納俊介・石黒立人 (編)　2002 『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社
河合　修　2010 『駿河山遺跡Ⅲ』(弥生・古墳・歴史時代編Ⅰ)　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 213 集
木田　清・前田清彦・沢辺利明　1988 『松任市八田小鮒遺跡』松任市教育委員会
木田　清　1990 『松任市旭小学校遺跡』松任市教育委員会
北野博司他　1987 『宿東山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
木戸春夫　1998 『沖田Ⅰ / 沖田Ⅱ / 沖田Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 231 集
1999 『小沼耕地遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 247 集
君島勝秀　1999 『外東 / 神田天神後 / 大久保条里』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 206 集
久々忠義　1981 「江上Ａ遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町遺構編－』 上市町教育委員会
楠　正勝　1992 『金沢市新保本町西遺跡Ⅲ』金沢市文化財紀要 97　金沢市教育委員会
楠　正勝他　1996 『金沢市西念・南新保遺跡　Ⅳ』金沢市文化財紀要 119　金沢市・金沢市教育委員会
小泉裕紀　2015 「静岡清水平野の古墳時代移行期の土器」『駿河における古墳時代前期集落の再検討』pp.19-36 静岡県考古学会
小島清一　1990 『鍛冶谷・新田口遺跡Ⅴ』戸田市遺跡調査会報告書第２集
木立雅朗・平田天秋他　1992 『藤橋遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
斉藤利昭　2001 『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』
坂口　一　1999 「周溝の巡る住居について」『三和工業団地Ⅰ遺跡（２）』pp.262-265　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 251 集
坂口　一他　1999 『三和工業団地Ⅰ遺跡（２）－縄文・古墳・奈良・平安時代他編－』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 251 集
佐々木彰ほか　1997 『伊興遺跡－下水道敷設に伴う調査－』足立区伊興遺跡調査会
1999 『伊興遺跡Ⅱ』足立区伊興遺跡調査会
実川順一ほか　1992 『東京都足立区　伊興遺跡』足立区伊興遺跡公園調査会
塩野　博・伊藤和彦　1968 『鍛冶谷・新田口遺跡』戸田市文化財調査報告Ⅱ
1978 『前谷遺跡発掘調査概要』戸田市文化財調査報告ＸⅢ
静岡県考古学会　2002 『静岡県における弥生時代集落の変遷』
2015 『駿河における古墳時代前期集落の再検討』
下濱貴子他　2004 『八里向山遺跡群』 小松市教育委員会
鈴木孝之　2011 『富田後遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 385 集
鈴木敏則　1992 『佐鳴湖西岸遺跡群　本文編Ⅰ』(財) 浜松市文化協会
高橋由知　1993 『松任市横江古屋敷遺跡Ⅰ』 松任市教育委員会
田嶋明人　1986 『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
田中正夫　1991 『小沼耕地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 100 集
田部井功・金子真土　1977 『鴻池・武良内・高畑』埼玉県遺跡発掘調査報告書第 11 集
田村隆太郎　2008 『上ノ平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 187 集
垣内光次郎・川畑　誠・布尾幸恵他　2000 『小松市平面梯川遺跡　第２・３次発掘調査報告書』（財）石川県埋蔵文化財センター

出越茂和　1995 「①平地式・竪穴式建物」『石川県金沢市　上荒屋遺跡Ⅰ　第２分冊　古墳時代編』金沢市文化財紀要 120 － 1　金沢市教育委員会
出越茂和他　1995 『石川県金沢市上荒屋遺跡Ⅰ　第２分冊古墳時代編』金沢市文化財紀要 120 － 2　金沢市教育委員会
栃木英道・戸潤幹夫・田嶋明人ほか　1990 『小松市高堂遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
土肥富士夫他　1983 『万行赤岩山遺跡』 七尾市教育委員会
中島広顕・小林高・小林理恵　1995 『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告 16 集
中島広顕・嶋村一志・長瀬出　2000 『豊島馬場遺跡Ⅱ』北区埋蔵文化財調査報告 25 集
中西道行・杉山　満　1982 『飯田遺跡Ⅲ』清水市教育委員会
中西道行・杉山　満　1983 『飯田遺跡Ⅳ』清水市教育委員会
新堀哲・山村貴輝ほか　2001 『川田・東原田遺跡』 小笠町教育委委員会
西口正純他　1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第 62 集
浜崎悟司他　1998 『石川県小松市　八幡遺跡Ⅰ』（社）石川県埋蔵文化財保存協会
久田正広ほか　2001『田鶴浜町三引Ｅ遺跡・三引Ｆ遺跡』(財) 石川県埋蔵文化財センター
平田天秋・西野秀和ほか　1982 『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
福田　聖　1999 「調査のまとめ 古墳時代」『上の宮遺跡』pp.90-98 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 252 集
2000 『方形周溝墓の再発見』 同成社
2009 「関東地方における「周溝」の研究をめぐって」『古代』第 122 号 pp.18-26　早稲田大学考古学会
2014 『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』私家版
2015 「関東地方における周溝持建物の系譜」『研究紀要』第 31 号 pp.87-106　(公財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
藤田邦雄他　1994 『藤井サンジョガリ遺跡・高畠テラダ遺跡・高畠カンジタ遺跡』 (社) 石川県埋蔵文化財保存協会
古川利意・吉田博行　1990 『若宮地区遺跡群発掘調査報告書　樋渡台畑遺跡群』 会津坂下町文化財調査報告書第 1 集　会津坂下町教育委員会
前田清彦　1995 『旭遺跡群Ⅲ』 松任市教育委員会
松井一明　2002 「竪穴住居と掘立柱建物―静岡県下における低地集落の建物構造と集落イメージ―」『静岡県における弥生時代集落の変遷』pp.86-109　静岡県考古学会
2015 「周溝付建物の西東比較研究 (静岡・西日本編)―静岡県の弥生後期～古墳初頭の周溝付建物を中心として」『静岡県考古学研究』№ 47 pp.51-70　静岡県考古学会
三浦京子　1991 『上之手八王子遺跡』玉村町教育委員会
南　久和　1991 『金沢市新保本町東遺跡』金沢市文化財紀要 85　金沢市教育委員会他
村田章人　1993 『原ケ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 127 集
山田成洋・大石泉　1990 『川合遺跡 (遺構編)』(本文編) 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 25 集
山田尚友・駒見佳容子　1998 『下大久保新田遺跡発掘調査報告書 (第 4 次)』浦和市遺跡調査会報告書第 238 集
山田尚友　1990 『本村Ⅷ遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第 125 集　浦和市遺跡調査会
山田尚友・岩井昭子　1996 『大久保領家片町遺跡発掘調査報告書（第８地点）』浦和市遺跡調査会報告書第 205 集
山田尚友・久保信乃　2000 『本村遺跡発掘調査報告書（第ⅩⅣ地点）』浦和市遺跡調査会報告書第 283 集
山田尚友・久保信乃　2000 『本村遺跡発掘調査報告書（第ⅩⅣ地点）』浦和市遺跡調査会報告書第 283 集
山本正敏他　1979 『富山県魚津市　佐伯遺跡発掘調査概要』 富山県教育委員会
吉岡伸夫・松井一明　1990 『若作遺跡・若作古墳群』 袋井市教育委員会
吉田　淳　1998 『長池・二日市・御経塚遺跡群』 野々市町教育委員会
吉田　稔他　1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 95 集

研究紀要 第３１号

２０１７

平成２９年３月１３日　印刷
平成２９年３月１７日　発行

発　行　公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒 369 － 0108　熊谷市船木台４丁目４番地１
http://www.saimaibun.or.jp
電　話　0493 － 39 － 3955
印　刷　関東図書株式会社